

国語や算数等の学習の土台を作るダイナミック遊び

「遊び」とは

遊びとは、本来子どもの成長を支える重要な活動です。自分が遊びたくて始めたことであれば、もっと楽しくしようとしたり、さらに深く追求しようとするでしょう。また、自分で始めたのだから、何かの問題が起これば、自分でなんとか解決しようとするはずです。

遊びには、その子どもの喜びやさらなる発見、驚きを追求しようとする明るく前向きな活動を実現できる可能性が潜んでいます。

そして、興味や関心を持って遊びを進める中で、人との関わりが生まれ、そこから遊びが拡がり深まっていくという相乗効果が見られます。

そこには身体を動かす、その場に合う遊び方を考える、ことばで伝え合う、時には起こった「いざこざ」に我慢を強いられることもあるなど、子どもの成長を支え人間性を営む要素が数限りなく含まれています。

つまり幼児期から小学校低学年までの子どもは、身近な世界である人物、自然、社会に興味や関心を抱き、そこに生まれる遊びに主体的に関わることによって心身の成長が促されます。

幼児から小学校低学年頃までの子どもは、興味や関心に基づ

いた自発的な活動である遊びは「面白い、楽しい」という心の満足感が得られることで成り立っています。

幼児から小学校低学年までは遊びという興味の対象に集中し、探索活動を深め、その結果さまざまな発達に必要な経験がそこに積み重ねられます。

つまり幼児期から小学校低学年頃までの子どもは、学ぶことを意識しているわけではないのに、面白い、楽しいと夢中になって遊んでいるうちに発達に必要な多くの経験が相互に関連し合いながらさまざまなことを学ぶことになります。

特に、幼児から小学校低学年の子どもたちは、飽きもせず面白がって行いますが、興味の無いことには意欲を持って取り組めないという傾向が強いのです。

発達と学習

発達と学習はどのような関係にあるのか、これには、発達が学習の基盤を作るという考え方があります。当NPO法人もこれに基づいた考え方を取り入れて活動を組み立てています。

発達の種類は、ことばの発達・遊びの発達・視空間の発達・仲間関係の発達・対人関係の発達・身体的発達・社会性の発達等があります。これらの発達が読み、書き、計算能力には不可欠です。学習は発達が用意した基盤構築の上に成立するという

見方です。

身体的な発達について考えてみましょう。身体的な発達は頭部から尾部へ、中心から末梢へと進みます。頭部から尾部へのパターンでは、乳児で考えると、乳児は座ったり歩いたりできるようになる前に頭部のコントロール(生後3ヶ月頃に首が据わる)が発達します。

中心から末梢へのパターンでは、手指の微細運動の発達の前に身体の中心に最も近い粗大運動が発達します。

3歳児は絵を描くときはまだ紙いっぱいぐるぐる描くだけですが、5歳児頃には鉛筆やクレヨンをうまく使って、人や家、動物などの絵を細かく描けるようになります。

粗大運動とは、首、体幹、腰、腕、足においてなされる大きな筋肉群を使った身体全体を大きく動かす運動のことです。粗大運動の発達は、寝返り、はいはい、お座り、歩く、走る、つかむ、跳ぶといった活動を含んでいます。

微細運動は、文字を手描きするような特定の作業を行うために、一連のわずかな筋肉群(手指や手首などの小さな筋肉群)を使う能力。微細運動能力は、発達的なものであり、子どもが書字や描画といった学習をすると、書字や描画は全般的に向上します。微細運動機能の障害は、書く能力の発達に不利となるものです。

粗大運動遊び

幼児期から小学校低学年の運動遊びは一つの運動を長時間行ったり、力強さを求めるのではなく、多様な動きを組み合わせることで体を巧妙に動かす経験を増やすことが望ましいと考えられています。

またこの年代の時期は、基本的運動の段階であり、基本的な運動が充実する時期です。基本的な動作は、体育科学センターの分類によれば、

○立つ、立ち上がる、寝る、起きる、ぶら下がるなどの「平衡系の動作」

○のぼる、這う、歩く、走る、潜る、隠れるなどの「移動系の動作」

○担ぐ、下ろす、つかむ、引く、投げる、ける、崩すなどの物を操作する能力である「操作系の動作」

に大きく分かれます。

生涯にわたって必要な運動の基礎作りをする時期が幼児から小学校低学年までなのです。従ってこの年代の子どもたちの興味や意欲を引き出しながら、これらの基本的な動作の多様な組み合わせを行う遊び（粗大運動遊び）をたくさん用意することが重要だと考えています。

粗大運動遊びはあらゆる運動の基礎となるものです。この運動能力の発達なくしては、その微細運動の発達もうまくいきません。

仲間関係の発達

遊びの中で仲間との関わりがどのように発達したのかを観察したのがパーテンです。パーテンは2才から4才の幼児の自由遊びを観察し、子ども同士の関係によって遊びを次のように分類しました。

- ①なにもない状態 : はっきりとした遊びのテーマがなく、物や自分の体をいじったりぼんやりしている
- ②傍観 : 他の子どもの遊びをずっと眺めている
- ③一人遊び : 他の子どもとちがった活動で遊んでいる
- ④平行遊び : 友達のそばで同じような活動をしているが、お互いの交流はない。
- ⑤連合遊び : 友達といっしょに遊んでいるが、各自のイメージの世界で遊んでいるだけで、はっきりとしたルールや役割分担がない
- ⑥協同遊び : 集団を通してはっきりとした遊びのテーマや役割がある

2才から4才にかけてなにもない状態・傍観→一人遊び→平

行遊び→連合遊び・協同遊びという順序で遊びの中で仲間関係が発達していくと考えられます。

通常の子どもは、このように2才から4才にかけて、仲間関係が発達していくが、軽度発達障がい児は仲間関係の発達の遅れがあり、小学校に入っても一人遊びか平行遊びにとどまり、連合遊びや協同遊びに達していない子どもは多いのです。原因として考えられるものに、次のようなものがあります。

- ①初めての人や場所に慣れにくく集団に入りにくい
- ②人との関わり方や遊び方が分からない
- ③遊びのレベルが低くて幼い
- ④ある特定のこだわった遊びを長く続けている
- ⑤行動面が安定せず常にふらふらしたり落ち着きがなく集中して遊べない
- ⑥自分勝手な行動が多く、相手に合わせられない
- ⑦模倣能力や観察能力が低い
- ⑧ことばの発達の遅れがあり会話が成立しにくい

連合遊びや共同遊びにまで発達しないと、仲間というものが生まれてきていません。そしてこのことは、子どもの社会性の獲得にとって大きな妨げとなるものです。

そしてそのことは、言葉の発達や社会的ルールの獲得にもおくれることが考えられます。

言葉の発達には、自分・他人・ものという関係（三項関係）が成り立っていることが前提条件としてあることが指摘されています。

ですから、連合遊びや共同遊びというレベルに達していないと、どうしてもことばの遅れなどを引き起こすことになってきます。

当NPO法人の指導方針

当NPO法人は、学校生活を「不安に送らせない」ための活動をしています。

国語や算数などの学習に遅れが目立ち学習内容が解りづらい、学校にて対人関係や他児とのコミュニケーションが成立しにくいなど多くの困難をかかえており、学校生活を不安に送っている子は多くいます。

また、不安をかかえることで問題行動や不登校にまで発展するケースもあります。

それらの学校生活に不安を送っている子どもたちに手を差し伸べる手段として効果を高めるために、次の方法を取り入れています。

①根本的な原因を探る

今の療育は対処療法的手段であり、表面的な問題点だけを考

えた活動が多く、根本的な問題点からの指導・教育ではないと考えられます。

当NPO法人は、根本的な原因を探るためにプロフィール用紙や観察ノートの活用や集団指導を通して、子どもの多くの行動観察のデータを集めて子どもの評価に役立て、根本的な問題点を解消するための活動をしています。

②早期指導・教育体制の確立

根本的な原因の解消には、3才からの早い年代からの取り組みが必要と考えています。長年、子どもの指導・教育に取り組み、考えさせられることがあります。

それは年齢が高くなればなるほど伸びにくくなることです。従ってなるべく早い段階からの必要性を痛切に感じています。

根本的な原因を「土台の弱さ」と呼んでおり「土台の弱さ」を「ダイナミック遊び＝粗大運動遊び」で「土台作り」をしています。

土台の弱さには、「身体のバランスの悪さ」や「こだわり・転導性・多動傾向などの行動面の問題」などがあり、これらをダイナミック遊びで改善させます。

このダイナミック遊びの対象年齢は3才から小学校低学年が理想ですが、子どもによっては、年齢が高くなってもダイナ

ミック遊びの対象年齢に入る子どももおります。

③学習レディネスの獲得

当NPO法人の特徴は、土台の弱さをかかえている子どもには、まずは、ダイナミック遊びで土台作りをしてから、学習態度・意欲の形成や読み・書き・計算などの学習レディネスを獲得するための指導・教育に入るという二段階の活動体制をとっています。

土台の弱さをかかえている子どもは学習レディネスの獲得が効果的に行なえなくなっています。学習レディネスの獲得を目指すためにも土台の弱さをダイナミック遊びで改善していくことが最優先課題となります。

学習レディネスとは、国語や算数などの学習をするための準備のことです。ことばの発達を促す、コミュニケーション能力を高めるために「ルールのある遊び」「イメージが育つ遊び」などの活動をしています。また、読み・書き・計算能力の習得の妨げとなっている「視覚性の弱さ・視空間の発達の遅れ」対策にも、重点的に行っています。要するに土台の弱さには「学習を支える能力の土台の弱さ」と「発達の土台の弱さ」があります。

④学校教育を支える学校レディネス

学校教育を支える子どものレディネスには2つあります。国語や算数などの学習を支える「学習レディネス」と学校生活を送るための学校という社会に適応するために必要な「学校レディネス」があります。

今日の学校教育は読む・書く・計算に始まる倫理的な思考をもつばら習得させようとするものです。その意味では、論理的な思考を教えるための準備を学習レディネスといいます。

しかし、学校における子どもの問題は、子どものみに起因するものでなく、子どもと学校・教師との関係性の問題や子どもと他の子どもとの関係性の問題などの学校レディネスにも目を向けなければなりません。

要するに、家族以外の教師という大人との間に信頼関係が作れなかったり、同年齢の子どもたちと友人関係を作り出すことが難しい子どももいます。特に、学校におけるグループや集団での遊びや生活場面での子ども一子ども・子ども一大人・子ども一子ども一大人の関係が成立することが求められています。

学校生活や学習活動以前の問題として家庭から離れ、学校生活での集団生活に耐えるだけの情緒的成熟を経ているというレディネスも考慮しなければなりません。

教師や仲間との関係を円滑に保つために我慢することや、時

には勇気を出して自分の気持ちを奮い立たせて自己表現するといった感情のコントロールも年齢相応に備わっていることも必要です。

今までの学校教育や家庭指導は、読み・書き・計算などの学習レディネス指導には熱心に取り組まれていましたが、学校レディネスにはあまり熱心に取り組まれてこなかったように感じます。

今の子どもたちの問題行動や不登校の原因となっているのが学習レディネス不足もありますが、それ以上に、学校レディネスに関する問題点が多いと感じられます。

当NPO法人は、学習レディネスと学校レディネスの両面からの指導・教育することでバランス良い発達を目指しています。

⑤保護者カウンセリング

子どもの日常生活の正しい行動の獲得や問題行動の改善またはことばやコミュニケーションを伸ばすためには、効率的な方法として子どもの指導・教育だけでなく、養育者として子どもに最も身近な関わり手であり、教育者でもある保護者にも指導・教育の役割の一端を担ってもらっています。

しかし、すべての役割を保護者に求めているわけではなく、保護者が可能な範囲内で役割分担をしてもらえれば良いと考

えています。

保護者カウンセリングでは、子どもの二次障害や問題行動の防止など日頃の家庭内や学校生活がスムーズに送れるように保護者にアドバイスをして、子どもの発達を伸ばすことを目的としています。

⑥こだわり

当NPO法人の指導・教育方法の特徴は国語や算数等の遅れや学校や家庭にての問題行動の対策として、対処療法的手法よりも発達の土台の弱さや学習を支える能力の弱さをダイナミック遊びで「土台作り」をすることにあります。

これらの土台の弱さの中で、特に重要な問題として考えられるものに「こだわり」があります。こだわりに関しては、多かれ少なかれほとんどの軽度発達障がい児が抱えている問題といっても過言ではありません。

こだわりを強く抱えている子どもは、ある特定の物事に強く固執してしまう子どもです。例えば、車は大好きなので常にミニカーを持ち歩く、誰かがそのミニカーに触ると大騒ぎをするといったことがあげられます。

また、環境が変わるとなかなかなじめなかったり、いつもの生活の流れ（順序）ややり方を保持しようとして、それが崩れ

たり、予測がつかなくなかったりすると嫌がる子どもがいます。遊びに関しても、同じ遊びを繰り返し、遊びの発展性が見られない子どもが多いです。

こだわりを抱えている子どもは、こだわりがあるばかりに、幼児期に獲得される「学習レディネス」の獲得が遅れることになり、国語や算数などの学習の遅れにつながります。それほどこだわりを抑制することが重要なのですが、保護者には日ごろの様子から、どこまでがこだわりであり、どこまでが好みの範囲なのかわかりにくいとの声を聞くことが多いです。そこで分かりやすく説明する場所として設けているのが保護者カウンセリングです。

ダイナミック遊び

軽度発達障がい児は、遊びの経験が少なかったり、遊びの種類が限られていることが多いです。特に、こだわった遊びしかできない、一人遊びが長く、グループ遊びや集団遊びに発展しない、自分勝手な考えが強く、相手に合わせようとしないなど友達と関わって遊ぶことが苦手な傾向が強いです。

また、新しい場面に入りにくい、対人関係の困難さ・変化に弱い・言葉の遅れやコミュニケーションが困難なため他児との会話が成立しにくいなどにより遊びの経験が少なくなります。

そのような子供たちに対して、いかにグループや集団の遊びの中で興味関心を広げ、多様な遊びの経験を援助するのかが求められます。

当 NPO 法人はそのような子どもたちに、遊びの経験を増やす場所として、自発的に子どもが思わずやってみたくなるような魅力があり、見本となるような遊びとして、バランスボール・スーパーボール・風船・長いトンネル状の布、広い大きな布・段ボールなどでダイナミックに遊ぶ活動をしています。

ダイナミック遊びは軽度発達障がい児が、興味を引くよう普通の子どもの遊びに工夫を加え軽度発達障がい児向けに開発した遊びです。ダイナミック遊びでは、身体全体を大きく動かして（粗大運動）の遊びになっているため、子どもには本当に楽しくて、面白い遊びになっています。そのため、長い時間、2時間でも、3時間でも連続して遊び続けられます。

ダイナミックに遊ぶことで、子どもの心を揺り動かし、心から感動を覚えることになるため、子どもは思わず遊びたいと思える遊びなので、どのようなタイプの子どもでも参加することができます。しかし年齢が高くなればなるほど参加意欲が低くなるので、なるべく早い年代からの参加が理想です。

ダイナミック遊びの狙い

ダイナミック遊びで行われる粗大運動の遊びでは粗大運動的に身体を大きく動かしての遊びをすることで、行動面（こだわり・転導性・多動傾向）の問題の抑制・対人関係を強める・言葉の発達を伸ばす・コミュニケーション能力を高める・身体的な発達を伸ばす・視覚性を強める（視空間の発達を伸ばす）・社会性を育てる・問題行動の改善などの支援をすることにあります。

つまりこれらの行動面の問題・問題行動の改善・各種の発達を伸ばすことを粗大運動に結び付けてとらえており、これらの様々な指導・教育に必要な粗大運動遊びを十分に経験させることで、学習レディネスを獲得させ、国語や算数などの学習の理解力を高めるようなバランスの良い発達を目指しています。

また、ダイナミック遊びで、身体全体を大きく動かして遊ぶことで、長い時間遊ぶこともできるし、心から本当に楽しいと思える満足感が得られます。それにより、子どもたちには主体性と喜びや達成感が引き出されることを狙いとしています。

そのためにも、個々のニーズにあった、ある程度の広い室内の遊び場や遊び相手（学生ボランティア）の確保などの適切な遊びの環境を設定し、様々な遊びや遊び道具に工夫を重ねて、子どもたちが参加しやすいようにしています。

遊べない子ども

軽度発達障がい児の主訴に国語や算数などの学習の遅れがありますが、その原因について考えられているものに幼児期から小学校低学年までのことばの遅れや視覚性の弱さ、視空間の発達の遅れなどがあげられます。

そして、これらによりイメージ力の弱さを引き起こし、学習に取り組む際に必要な学習態度や学習意欲にも悪影響を及ぼしています。

ことばの発達や視覚性・視空間の発達は、幼児期から小学校低学年における日々の遊びの中から育ってくるものです。

ところが、この「遊び」そのものが苦手となり「遊べない」子どもが多いのです。その原因を考えると次のようなものがあります。

- ①他の子どもと良好な関係が作れない
- ②こだわりが強く、特定のこだわった遊びしかできない
- ③グループや集団で遊ぶ経験が少ない
- ④遊びのレベルが低くて幼い
- ⑤一人遊びが長い
- ⑥人に合わせられず。自分勝手な行動が多い
- ⑦本当に遊びの楽しさ面白さを理解していない

「遊べない」子どもを「遊ばせる」ためには、子どもが思わ

ず遊びたい、遊んでみたいと思わせるような工夫が必要です。当NPO法人が、取り入れているダイナミック遊びには次のような工夫がされています。

①遊べない子どもを遊ばせるための最初の段階は、大人に遊んでもらう楽しさを知ることです。保護者では、我が子の遊び相手は苦手・遊び相手をするだけの体力が無いという人が多いです。そこで、大学生や社会人のお姉さんやお兄さんに遊び相手をお願いして遊んでもらっています。

②遊べない子どもは、遊びに誘ってもなかなかその遊びの中に入ってこない、入ったとしてもすぐに止めてしまう子どもが多いです。そのような子どもと良好な関係をつくって遊ばせるための媒体としてバランスボールやスーパーボールを使っています。それらであれば、子どもたちにとって興味をもちやすく、見ただけで思わず遊びたいとの思いを強くもつため、どの子どもでも遊びに入りやすい道具になります。

③公民館の実技室やプレイホール等のある程度の広い場所で遊ばせる必要があります。子どもは、バランスボールやスーパーボールなどで身体全体を大きく動かす遊びはみんな大好きです。

大きなバランスボールを投げ合う、蹴り合うことを長い時間楽しく行うことで、体幹の強化や身体バランスの弱さの改善に

つながります。数多くのスーパーボールを床に投げつけると大きく飛び跳ね室内全体に広く散らばるので、それを目で追うことで室内全体を見渡すことになるために、視空間の発達の伸びが見込めます。

遊び場所が、広い体育館では、あまりに広すぎるため、バランスボールやスーパーボールで遊んでも、人に目が向きにくくなり、遊び相手となる大人や他の子どもたちとの関わりが希薄になりやすいのです。

ある程度の広い場所であれば、遊び相手となる人々と密接に関わりやすく、人に気持ちが向くので、対人関係が育ちやすくなります。

また、対人関係を伸ばすことを考えると、自然の中での遊びがありますが、自然の中では、人に目が向かず、自然ばかりに目が向く傾向が強くなり、自然とのふれあいが優先し、人との関わりが少なくなるので、対人関係が育たないことが考えられます。

従って、体育館の広い場所や戸外での遊びをしていれば良いというのではなく、対人関係を育てることを考えれば、あくまでも、ダイナミック遊びの活動の場所はある程度の広い場所での活動になります。

④遊びが苦手であり、遊べない子どもはある程度遊べるのだが、

遊びのレベルが低かったり、幼かったり、遊べる時間が短くなるなど、本当の遊びの楽しさ、面白さを理解しないまま日々の生活を送っています。

そのような子どもたちに本当の遊びの楽しさ、面白さを教えるためには長い時間（約2時間から3時間）連続して遊べるような工夫が必要です。バランスボールやスーパーボールなどの身体全体を大きく使う粗大運動遊びを2種類から3種類用意し、それをうまく組み合わせて長い時間連続して遊ばせるようにしています。それにより、遊びの楽しさ、面白さを理解できます。

⑤楽しく遊ぶことが大切、本来の遊びとは心の満足を得ることが目的です。楽しく遊べる工夫として、楽しく遊ばせるためにはダイナミック遊びをしているときに子どもに細かい問題点があったとしても、ある程度目をつむり、最低限の注意で済ませること、また、他児とのトラブルやケンカがあっても、よほどのことがない限りはこれも最低限の介入だけにして、子どもが楽しく遊ばせることを最優先に考えて、心の満足が得られるようにサポートすることを心がけています。

保護者カウンセリングの必要性

当NPO法人の行っている活動の狙いは、学校以外の場所で

の子どもの発達を伸ばすことになります。学校ではなかなかできない経験や学習を積み上げられるような場を提供することで、問題行動の改善や国語・算数などの学習のつまずきを無くすることです。

学校で問題行動があり、他の子どもたちとうまく関わっていない子どもや、国語や算数などの学習につまずいている子どもに、その問題を解決する場として、また、有意義な学校生活を送ること、学校での劣等感や、挫折経験をケアしたり、ストレスの発散の場所として活用してほしいと考えています。

保護者は、学校で、なかなか集団の中に入っていけない子どもに対して、無理なく仲間と関わり、楽しく過ごせる場所を探すでしょう。それはスポーツを中心とする活動でも良いし、趣味に近いものでもよいかもしれません。その中に長い時間（約3時間）身体全体を大きく動かし楽しく遊べる「ダイナミック遊び」も入れてほしいと思っています。

学校以外での指導・教育力をうまく利用することが大切ですが、その公教育以外の選択は保護者に任されています。子どもによかれと思って、たくさんの塾通いや習い事をさせて結局子どもにとっては負担が重くなり、最悪の場合は子どもに二次障害が起こり、問題行動になることがあります。

軽度発達障がい児は、多動傾向の場合高学年になるにつれて

状態が改善されるケースがありますが、低学年時代から精神的負担と情緒的不安が蓄積されるような場合は、問題行動や不登校に陥ってしまう可能性があります。

そこで、二次障害が起こらないように、保護者や子どもの負担を軽くする方法としてプロフィール用紙や観察ノートを利用して保護者カウンセリングを行っています。

保護者カウンセリングは、保護者に書いてもらうプロフィール用紙や観察ノートから子どもを評価し子どもの現在かかえている問題点や保護者にとっての不安や疑問点などについて、保護者にアドバイスをを行い、家庭内で実践してもらうものです。

家庭との連携

軽度発達障がい児の発達を伸ばし、国語や算数の学習につまづかせないためには、学校・家庭・地域社会がそれぞれの役割と機能を発揮して育てることが求められています。

特に軽度発達障がい児の問題は複雑で多様性があり分かりにくい子どもです。また、年齢が上がるにつれて問題が変化してくるため、保護者にとっては子育てに大変不安を感じ対応に苦慮しているのが現状です。

そこで、保護者の不安を解消し、正しい子育てをしてもらうために当NPO法人は家庭と連絡を密にとって指導・教育に当

たっています。当NPO法人が考えている家庭との連携の大切なポイントは、次のようになります。

- ①保護者が子どもの特性や問題点を理解し、子どもの正しい姿を把握してもらうこと。
- ②保護者が当NPO法人と協力して指導・教育に取り組むという意思があること
- ③当NPO法人と保護者のそれぞれの役割を明確にすること
- ④保護者が、日頃の子育てで、何らかの心配事が起こったときのためにホットラインとして電話での相談を受ける連絡体制が確立されていること
- ⑤子どもの問題が多岐にわたっているため保護者にとっては、多くの問題点の中からどこからどのように手をつけ行けば良いの分かりにくいいため、優先順位をつけて保護者に分かりやすく説明する手段があること。
- ⑥3ヶ月に一度のペースで家庭指導における成果を評価し、今後の指導・教育に役立てること。
- ⑦保護者と学校との連携が必要になったときは、保護者と学校の橋渡しをし、保護者が求めているものを学校に伝えられるように準備すること。